



令和 7 年 11 月 1 日 (土) 10:00-11:00

第 1 会場

<テーマ>

生理検査のパニック値を考える

<ねらい>

生理検査において、患者の生命が危険にさらされている可能性を示す緊急性の高い異常所見に遭遇する場面は多く、速やかに臨床側へ報告し、直ちに対応・治療を開始する必要があるパニック値について知っておく必要があります。生理検査のパニック値の具体的な基準値は検査の種類によって異なり、また医療機関ごとに運用指針を定めておく必要があります。

たとえば、生命の危険を示す心電図波形はパニック値にあたります。また、超音波検査などの画像検査でも、緊急対応を要する画像所見はパニック値ととらえて、直ちに治療や処置が必要となる場合があります。

検体検査に比べ生理検査のパニック値に対する具体的な基準や報告、対応の手順は、医療機関ごとに異なり、経験的に運用されている場合が多い。

今後、ある一定の統一された基準が必要とされる中で、今回生理検査のパニック値を多角的に学んでいただき、自施設での基準作りの一助としていただきたい。

司会 福本 義輝（済生会松阪総合病院）

<講演内容>

1. やってる？そろそろやらないとね！生理検査のパニック値報告

演者：田中 夏奈（小牧市民病院 臨床検査課）

2. 超音波検査のパニック所見：実臨床での役割と意義

～技師の立場で知っておきたいパニック所見の対応～

演者：山本 幸治（三重県臨床検査技師会参与）